

,Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge‘の堀辰雄訳をめぐって

—「手記」の恐怖から「菜穂子」の不安へ—

飯 島 洋

I

堀辰雄は長年にわたってリルケ Rainer Maria Rilke の作品を愛読し、その表現や理念を自己の作品に取り入れた。リルケに関する随筆や翻訳も執筆され、生前には収録作品の異同はあるが「リルケ雑記」(『雉子日記』河出書房 一九四〇・七 所収、七編)、「リルケ私記」(『堀辰雄小品集・薔薇』一九五一・六 所収、九編)としてまとめられている。

Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge の冒頭部を邦訳した「「マルテ・ロオリッツ・ブリッゲの手記」から」(前半は「四季」一九三四・十 「マルテ・ロオリッツ・ブリッゲの手記」、後半は「四季」一九三四・十二 「二つの断片(マルテ・ロオリッツ・ブリッゲの手記)から」)は、そうしたリルケ関連作品の嚆矢となる。

堀は後年にはかなりのドイツ語読解力を身につけたが、この時点ではまだその語学力はおぼつかなかった。そのためドイツ語原典に加え Maurice Betz による仏訳 *Les cahiers de Malte Laurids Brigge* を傍らに置いての作業だった。

さて、この仏訳参照は、私見によれば、単に原文の理解しがたい部分を明確にする、という純粋な技術的問題にはとどまっていない。ドイツ語とフランス語の文章が時に見せるニュアンスの相違に直面し、堀は主体的にそのどちらかを選択していった。その選択に、堀の作品理解のあり方の一端が示さ

れていると思われる。

II

何箇所かでは、フランス語訳が原文の細かな意味を略してしまった部分を、堀は原文によって復元している。

Die Straße war zu leer,

La rue était vide ;

町はあまりに空虚だった。

原典に忠実に、zu を訳出している。

Aber es war noch etwas. Es war eine Stimme,

Mais il restait autre chose. Il y restait une voix,

が、それはまだ何かであつた。それは一つの声であつた。

フランス語訳は「まだ他のものが残っていた」ということを意味する。原典は死のうとしている老侍従の「大きな、薄暗い塊り」が「腐敗物の上に被せられてゐる大きな衣類に過ぎない」ことを周りの者たちは望みながら、それは（大きな衣類以上の）何物か「であつた」(war) ことを示している。フランス語訳は *autre chose* (他のもの) という語句を用いることによって、「塊り」以外のものが別に存在することを意味してしまっている。厳密には、「腐敗物の上に被せられてゐる大きな衣類に過ぎない」ものと、「何か」は同一物であり、それが死なのだから、フランス語訳は微妙な逸脱をきたしている。堀はこのわずかな差異を見逃さず、原典の訳を選択したといえる。

Ich fürchte mich. Gegen die Furcht muß man etwas tun, wenn man sie einmal hat.

J'ai peur. Il faut faire quelque chose contre la peur, quand elle vous tient.

私は恐ろしくてしやうがない。一度恐ろしいやうな気がしたら、そいつを何とかしてしまはなければならない。

einmal (「一度」) を仏訳のように省略してしまうことなく訳に反映させている。

Und was gab das den Frauen für eine wehmütige Schönheit, wenn sie schwanger

Et de quelle mélancolique douceur était la beauté des femmes lorsqu'elles étaient enceintes,

さうしてそれは妊娠してゐる女達に何といふいたいたしい美しさを与へてゐたことか！

フランス語訳は、「妊娠している女達の美しさは、なんと物悲しい甘美さであつたことか」という意味になっている。しかし原典では先行する文で子供たちが「それまでであつたところのものと、彼等がこれからなるであらうところのものととの合体したものになりながら」死んでいったことを受けて、das（それ）が「妊娠している女性に物悲しい美しさを与える」と述べている。フランス語訳は、ドイツ語 *geben*（与える）の意を汲みとろうとして却って文脈を見失っている。堀は原典のニュアンスを精確に表出することに成功している。

次に、フランス語訳は原文を多少意識しているが、そちらが選択されているものについて考察する。

So, also hierher kommen die Leute, um zu leben, ich würde eher meinen, es stürbe sich hier. Ich bin ausgewesen. Ich habe gesehen: Hospitäl.

C'est donc ici que les gens viennent pour vivre ? Je serais plutôt tenté de croire que l'on meurt ici. Je suis sorti. J'ai vu des hôpitaux.

一体、此処へは人々は生きるためにやつて来るのだらうか？ 寧ろ、此処は死場所なのだと思つた方がよくはないのか知らん？ 私はいま其処から追ひ出されてきた。私はいくつも病院を見た。

原文は平叙文で、「つまりは人々は生きるためにここにやってくる」という。これが事実なのだが、それを接続法で受けて「ここで死ぬのではないかと思う」と述べている。フランス語訳はそれが「つまりは人々は生きるためにここにやってくるのか？」という疑問形を取り、目の前の現実に対する違和感、疎外感を強めている。堀はこの仏訳に従っている。

また、「追ひ出されてきた」の部分は原文・仏訳とも「外に出た」ことを意

味するだけだが、堀の訳は外に出たことが自分の意志ではないことを示し、疎外感が強調されている。

Und wäre es jemandem eingefallen zu fragen, was die Ursache von alledem sei, was über dieses ängstlich gehütete Zimmer alles Untergangs Fülle herabgerufen habe,—so hätte es nur eine Antwort gegeben: der Tod.

Et si quelqu'un s'était avisé de demander quelle était la cause de tout cela, et qui avait appelé sur cette chambre, longtemps surveillée avec inquiétude, tout l'effroi de la destruction, il n'y aurait eu à cette question qu'une réponse : la Mort.

そしてこれらすべての原因は何であるか、これほど注意深く面倒を見られてゐる部屋に、何がかかる破壊の恐怖の一切を呼びよせたのであるか？ と若しも誰かが尋ねることを思ひついたら、その質問に対しては唯一つの答しかあるまい。即ち、それは死なのだ。

alles Untergangs Fülle は「すべての多くの破壊」を、フランス語の tout l'effroi de la destruction は「すべての破壊の恐怖」を意味する。部屋を支配する恐ろしい気配を強調するために、Betz が付加した effroi（恐怖）を訳出している。

主人公マルテの情念を正確にとらえるため、堀はドイツ語原文とフランス語訳を詳細に検討し、言葉を選択している。冒頭だけのささやかな試訳とはいえ、堀はここで創造行為に及んでいたといえるのではないか。

III

さて、つづいて特定の語句の解釈の問題に移る。原文の Angst をどう訳しているかに注目する。

Die Gasse begann von allen Seiten zu riechen. Es roch, soviel sich unterscheiden ließ, nach Jodoform, nach dem Fett von pommes frites, nach Angst. ...Das Kind schlief, der Mund war offen, atmete Jodoform, pommes frites, Angst. Das war nun mal so. Die Hauptsache war, daß man lebte. Das war die Hauptsache.

La rue commença à dégager de toutes parts des odeurs. Autant que je pouvais distinguer, cela sentait l'iodoforme, la graisse de pommes frites, la peur. ...L'enfant dormait, sa bouche était ouverte et respirait l'iodoforme, l'odeur des pommes frites, de la peur. C'était ainsi, voilà tout. L'important était que l'on vécût. Oui, c'était là l'important.

小路が四方八方から臭ひはじめる。私にそれが嗅ぎ分けられたところでは、それはヨオドフォルムの匂、揚林檎の油の匂、恐怖の匂だ。…子供は眠つてゐた。口を開けて。そしてヨオドフォルムや、揚林檎の油や、恐怖の匂を吸ひ込んでゐた。まあかういつたところなのだった。肝腎なことは、人々が其処で暮らしてゐるといふことだ。それは一番肝腎なことだ。

このように *Angst* を堀は「恐怖」と訳している。*Angst* は「不安、怖れ、心配」といったほどの意味を持ち、これに対して *Maurice Betz* は *peur* の語を充てている。

日本語の語感としては、「恐怖」「不安」いずれも生の根源にかかわる心的現象とはいえ、「恐怖」の方がより身体に即した本能的な反応のニュアンスが強く、不安は対象が不明確なだけにより意識的、精神的な内容を含むと捉えられるのではないか。実存哲学のハイデガーの最重要作「存在と時間」でも、死に向う人間存在の基盤として *Angst* が挙げられているが、翻訳書では基本的に「不安」の語が充てられている。

ドイツ語では「恐怖」はむしろ

Ich fürchte mich. Gegen die Furcht muß man etwas tun, wenn man sie einmal hat. Es wäre sehr häßlich, hier krank zu werden, und fiel es jemandem ein, mich ins Hôtel-Dieu zu schaffen, so würde ich dort gewiß sterben.

私は恐ろしくてしやうがない。一度恐ろしいやうな気がしたら、そいつを何とかしてしまはなければならない。こんな場所で、病気にでもなつた日には、それこそ堪らないだらう。誰かが自分を *Hôtel-Dieu* (市立病院) に入院させにやつて来て呉れようとも、自分はきつと其処で死んでしまふだらう。

のように *Furcht* の語がより近いニュアンスを持つと思われる。病気になって病院に運ばれたら死んでしまうだろうという思いは身体に即した恐れであり、「恐怖」の語が相応しい。ここでは「恐ろしくて…」と訳されているが、

Ich habe etwas getan gegen die Furcht.

J'ai fait quelque chose contre la peur.

私は恐怖に対して多少抵抗を試みて見た。

の例に見られるように、ここでの *Furcht* には「恐怖」を充てている。

また、

er war wie ein König, den man den Schrecklichen nennt, später und immer.

elle était pareille à une reine qu'on appelle la Terrible, plus tard et toujours.

そいつはまるで王様のやうであつた。そしてそいつは、その後、そして何時までも、人々から「恐怖」と呼ばれてゐた。

という部分は、老侍従ブリッゲの死が屋敷を支配するその気配を表現している。原典の *den Schrecklichen* は形容詞 *schrecklich* の名詞化したもので、恐ろしいものを意味する。この形容詞はそもそも名詞 *Schreck* (恐怖) に由来するから、堀が「恐怖」の語で訳したのはごく自然なことといえる。

こうしてみると、本能的に人を怯えさせ、ぞっとさせるニュアンスの強い「恐怖」の語には他の語が対応しており、*Angst* に「恐怖」を充てるのは微妙なずれを感じざるを得ない。町に漂う不快な臭いに混じる負の感覚を、人間の存在を身体感覚で脅かす本能的なものと解釈し、それに対しては精神性に近い「不安」より「恐怖」の語が相応しいと判断したのであろう。

IV

さて、この翻訳以後、「不安」の語は堀にとって親しいものになってゆく。堀はフランソワ・モーリアック *François Mauriac* の「テレーズ・デスケルー」*Thérèse Desqueyieux* を愛読し、随筆「ヴェランダにて」(「新潮」一九三六・六)でその方法論を激賞しているが、ここで注意したいのは堀がこの作品の概要を解説する上で用いる用語である。

モオリアックの愛してゐるのは、テレエズの痛々しいまでな不安なのであらう

テレエズの夫のやうな、自分に満足し切つて、いくちのない平和を食つてゐる人間の裡に、はげしい不安を呼び醒まさずにはおかないやうな恐ろしい義務、テレエズをしてあんな惨めな行為に駆りやつたもの、主人公テレエズの内面を領するもの、またテレエズが他者の内部に引き起こすものを堀は「不安」と名付けている。このテレエズ体験は堀にとって深甚なもので、『菜穂子』の主人公の造形の根幹にかかわっている。

唯、菜穂子の昔を知つてゐる友達たちは、なぜ彼女が結婚の相手にそんな世間並の男を選んだのか、皆不思議がつた。が、誰一人、それはその当時彼女を劫かしてゐた不安な生から逃れるためだつた事を知るものはなかつた。（「菜穂子」）

また菜穂子の夫、圭介はサナトリウムで療養生活を送る妻の姿に心を揺さぶられて

彼はいま自分の心を充たしてゐるものが、実は死の一步手前の存在としての生の不安であるといふやうな深い事情には思い到らなかつた。（「菜穂子」）

と述懐している。特に後者はハイデガーの実存哲学のを髣髴させるもので、堀がリルケ研究に愛読した Angelloz の Rainer Maria Rilke でも

Dans son grand ouvrage *Sein und Zeit*, Heidegger pose la question de l'être, de ses rapports avec le monde, c'est-à-dire avec le «On», qui correspond partiellement à «l'Autre» de Rilke. Il place à la base de l'être, en particulier de l'être qui cherche sa place en face de la mort, le «souci» (Sorge) et «l'angoisse» (Angst). Il repousse l'effort du «on» pour trouver un apaisement à cette crainte de la mort, car celle-ci est la grande certitude et la condition même de l'existence, dont le but est d'atteindre, en face d'elle, la liberté : «Freiheit zum Tode».

大作「存在と時間」において、ハイデガーは存在の問題、存在の世界との関係についての問題を提示している。世界とはいわば「人々」、リ

ルケの「他者」と部分的に対応するものである。ハイデガーは存在、特に死と直面してその立脚点を求める存在の根底に、「配慮」と「不安」を置く。彼は死への恐れに対する安らぎを見出そうとする「人々」の努力を退ける。死は実存の条件であり、実存の目的は死を前にして自由を見出すこと、「死に向かった自由」なのである。

と述べられている。

夢を追う生を選んで病に斃れる幼馴染の都築明がサナトリウムを訪れると、菜穂子は彼が去った後

冬空を過つた一つの鳥かげのやうに、自分の前をちらりと通りすぎただけでその儘消え去るかと思えた一人の旅びと、……その不安さうな姿が時の立つにつれていよいよ深くなる痕跡を菜穂子の上に印した

と振り返っている。

遡れば母の三村夫人も、幸福を求める生き方を幻影にとらわれているという娘・菜穂子に対し、その考えを

自分で自分がどんなところへ行つてしまふか分らないと云つたやうな、そんな不安な思ひからお前が苦しまぎれに縋すがりついてゐる、成熟した他人の思想

と見なしている。自分自身もロマネスクな生への志向に揺り動かされていたことを

何かと絶えず生の不安に怯やかされてゐる私のもう一つの姿は、私が自分勝手に作り上げている架空の姿に過ぎないのではないか（「楡の家」）と述懐している。これらを総括すれば、日常的な生（ハイデガー流に言えば頹落した状態）の安定を喪失し、死を含め、人間実存の問題に直面せざるを得なくなったときに人を捉える情念、それを『菜穂子』の登場人物たちを捉えた「不安」と解釈してよからう。

こうした造形はテレズやその夫ベルナールの生成する物語を外形的に踏襲しているのは既によく知られている。ところが、典拠となる原典の表現に眼を向けると、興味深いことが見えてくる。

結婚の理由として挙げられていた「生の不安」は、*Thérèse Desqueyieux* で

は *panique* の語が用いられている。

peut-être cherchait-elle moins dans le mariage une domination, une possession, qu'un refuge. Ce qui l'y avait précipitée, n'était-ce pas une panique ?

彼女はおそらく結婚に、支配や所有よりは避難所を求めたのだ。彼女を結婚へと駆り立てたものは、恐怖ではなかったか。

翻訳によっては「不安」の訳語があてられているが、語源に遡って考えてみれば、人心を恐怖に陥れる *Pan* の神が語源であるこの語は、理性や思考を喪失させる本能的な怖れを意味している。テレーズの生を忠実に菜穂子に生かそうとするならば、「生の恐怖」としてもよかった筈である。しかし堀は「恐怖」の語を採らなかった。

J'allais vous répondre : « Je ne sais pas pourquoi j'ai fait cela » ; mais maintenant, peut-être le sais-je, figurez-vous ! Il se pourrait que ce fût pour voir dans vos yeux une inquiétude,

私は「なぜそんなことをしたのかわからない」と答えたけれど、今は多分わかる。考えてごらんなさい。あなたの眼の中に不安を見るためだったかもしれないと。

この文は、テレーズが夫に毒を盛り、安定した日常の状態を揺さぶって、夫を生不安定さに直面させようとしている場面であり、*inquiétude* の語は日本語の「不安」に最も近いニュアンスを持っているといえる。*Thérèse Desqueyieux* では *panique* と *inquiétude*、恐怖と不安は意味が使い分けられている。

『風立ちぬ』では堀は三箇所にわたって「恐怖」の語を用いていた。節子が入所したサナトリウムで最重症だった病人の死を知り、節子が二番目に重いといわれていたのを思い出した主人公は「不安や恐怖を抱きはじめ」、創作の構想を練る中で若き女主人公の死を夢想しては

死に瀕した娘の影像が思いがけない烈しさを私を打った。私はあたかも夢から覚めたかのやうに何んともかとも言ひようのない恐怖と羞恥とに襲はれた

という。さらに、病が重くなった節子が父の姿を求めていることを知って「突然咽をしめつけられるやうな恐怖」に襲われる。

三例いずれも、節子を自分から奪われることへの激しい抵抗が「恐怖」の語によってあらわされている。理性的な思念を介さない、本能的な情念といえよう。

一方「不安」の語は、

私達がいま私達の幸福だと思つてゐるものは、私達がそれを信じてゐるよりは、もつと束の間のもの、もつと気まぐれに近いやうなものではないだらうか？……

夜伽に疲れた私は、病人の微睡んでゐる傍で、そんな考へをとつおいつしながら、この頃ともすれば私達の幸福が何物かに脅かされがちなのを、不安さうに感じてゐた。

や

私はそれ（幸福を主題とする自分の創作 論者注）を読み続けてゐる自分自身の裡に、その物語の主題をなしてゐる私達自身の「幸福」をもう完全には味わへさうもなくなつてゐる、本当に思ひがけない不安さうな私の姿を見出しはじめてゐた。

のように使われている。ここでの「不安」は、自分たちの生の幸福を取り巻く状況が変化する中で、それに対してどうすればよいか、何らかの態度表明が求められている場面で主人公が抱く感情と考えられよう。

『菜穂子』には、「恐怖」の語は使われず、それに近い「怖れ」も夫や義母が菜穂子に対する時に抱きはするが、菜穂子本人の感情としては一度も使われていない。菜穂子が抱くのは「不安」である。菜穂子是不安的存在とも呼べよう。直面する生や死の問題に、身体的、本能的な自己保存反応で対するのではなく、精神的、思惟的に向き合おうとする人間として、彼女は造形されているのである。